慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	初期漱石における「情」の様相：『文学論』・「文学論ノート」をめぐって
Sub Title	
Author	伊藤, 節子(Ito, Kiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2014
Jtitle	三田國文 No.59 (2014. 12) ,p.101(16)- 116(1)
JaLC DOI	10.14991/002.20141200-0116
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20141200-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初期漱石における「情」の様相
――『文学論』・「文学論ノート」をめぐって――

伊藤　節子

Ⅰ．もうひとつの〈知〉――「認識的要素（F）」の内実――

初期漱石において、近代知としての「科学」は「文学」を定義づける差異の最たるものであった[(1)]。「文学」と「科学」がその本性を異にすることは、英国留学中の「文学論ノート[(2)]」（以下「ノート」）に記されており、「文学」を外部との比較によって規定する試みは作家以前の段階に窺うことができる。一方、〈情〉なるものは、漱石が関心を寄せた意識の三大要素、いわゆる〈知情意〉のひとつとして挙げられると同時に、「文学の試金石」（『文学論』明36・9―同38・6講義、同40・5大倉書店刊）と明言されたところのものではあるが、その概念の曖昧さは否めない。

近年、『文学論』への関心の高まりに伴い、〈情〉なるものに迫る論考が散見される。たとえば、理論として説かれた「情緒」のありようを諸作品に読み取ろうとするものや同時代に流布していた心理学言説における〈情〉概念との差異を指摘するものなどがあるが、「文学」の内部的要素であるだけに、そのつかみどころのなさも露呈しているように思われる。本稿では『文学論』・「ノート」を中心に〈情〉という要素をひとつの機能として抽出し、それが漱石にとってどのような意味をもつものであったかを検証したい。

『文学論』において、「文学」を規定する中心的概念「認識的要素（F）」と「情緒的要素（f）」が、「吾人が日常経験する印象及び観念[(3)]」とも言われるように、これらは経験世界に及ぶ概念であり、多様な解釈の余地を含んでもいる。この記号が「文学」の範囲に限定されない現実世界の要素でもあり得ることは、哲学から生物学に至るまで、あらゆる分野に考察の及んだ「ノート」を想起させつつ、〈情〉なるものを多面的に映し出しうるものでもあって、「情緒的要素（f）」を問うことは、〈情〉の本質を解き明かす手立てにもなると考えられる。

まず、「認識的要素（F）」について確認したい。『文学論』研究において「認識的要素（F）」=「意識」と捉えられることがしばしばあるように、「焦点的」といわれることで混同しがちではあるが、両者は必ずしも同じ概念ではない。意識中に「認識的要素（F）」の要素が含まれることは言うまでもないが、等号で結んだ場合、意識中に働く「情緒的要素（f）」を除外せざるを得ず、「日常経験」に挙げられた「㋷fのみ存在し

て、それに相応すべきFを認め得ざる場合」を否定する結果となってしまう。『文学論』において、「意識におけるF」という記述はあってもFである「意識」として語られることはないのである。「認識的要素（F）」は「意識」という全体の内部に働くものであると考えねばならない。

「認識的要素（F）」は「一刻にFある如く、十刻、二十刻、さては一時間の意識の流にも同じくFと称し得べきもの」という時間の流れに伴う集合体としての意味も与えられ、これを広義に分類すると「㈠一刻の意識に於けるF、㈡個人的一世の一時期に於けるF、㈢社会進化の一時期に於けるF」となる。「意識の波」の頂点にあたるのが、「㈠一刻の意識に於けるF」であることは言うまでもないが、これを敷衍して挙げられる「㈡個人的一世の一時期に於けるF」および「㈢社会進化の一時期に於けるF」との間には大きな差があるといえる。というのは㈠が一刻という瞬間の中で直接的に認識されるのに対し、㈡㈢は「追想」という方法をとることにある。この認識過程の違いは「認識的要素（F）」が「焦点的印象または観念」と言われることと結びついていると考えられる。

> 人あり或時期の間、頻りに漢詩を愛読し後数年全く之を放棄して更に手にすることなかりしが、偶然再びこれを繙きたりと仮定せよ。如此瞬間に於いては、よく其意義を解し得るにも関せず、其印象詩境共に漠然として明瞭を欠き従つて湧き出づる興味も頗る淡し。然れども暫く習読を重ぬれば詩中の情景自ら脳裡に整ひ其感興遂に極度に達し、更に之を連続するときは漸次再び無趣味の域に傾くに至るべし。これ其漢詩に対する意識次第に識末より焦点にのぼり更に再び識末に下るに基くものと云ひ得べし。

時間を経た現在において、ある「時期的F」が「意義は解し得るにも関せず」「漠然」とした「印象」であることは、「追想」する現在における、ある「時期的F」が感覚にうったえる「印象」ではなく「意義」として解すべき「観念」であることを示している。また、「習読を重ぬれば詩中の情景自ら脳裡に整」うとは、「観念」としてのFが「印象」としてのFに移行することを意味するだろう。「一刻の意識におけるF」がSt. Paul’sを見る例に視覚的イメージとして説明されるように、漢詩の「情景」が「脳裡に整」う、とは「時期的F」を「一刻の意識におけるF」に還元していると言えるのである。

ここでfという記号こそ用いられていないものの、「詩境」「興味」「感興」は「情緒的要素」に該当するものであって、「Fの具体の度に正比例」して附着するfが抽象度の高い「観念」において「興味」が「頗る淡」くなることは言うまでもない。それと反対に「習読」によって、「情景」が「脳裡に整」うこと、いわば「印象」となる時には、「感興遂に極度に達し、更に之を連続するときは漸次再び無趣味の域に傾く」、すなわちfが最大限に喚起されるのである。

「または」という並列関係でつながれ、一つにくくられた「印象または観念」である「認識的要素（F）」は大きく印象認識と観念認識という二つのあり方を呈する。このことは「ノート」に、人間の知的認識の過程として挙げられた「impression」と「conception」の関係に相当するといえる。[(4)]「認識的要素（F）」には「科学」としての観念的な〈知〉の一方に、感覚的な印象認識という〈知〉の側面があるのである。

これに関連して「ノート」、「Monoconscious Theory」の項を参照したい。「余ノ formula」「余ノ monoconscious theory」言われることから、「monoconscious」の語は漱石の造語であると考えられており、岡三郎はこれを「純一意識」と訳している。[(5)]「intensity ノ capacity ガ constant ナレバ：――The intensity of the focal impression or idea is inversely proportional to the intensity of the marginal.」（焦点的印象または観念は辺端的意識の強度に反比例する）つまり、意識は一つの対象のみしか焦点化し得ないと言われるように、意識における焦点の単一性が字義通り示される論理である。認識的要素が「impression」と「idea」に分類される中で、とりわけ「impression」について詳しく言及されていることに注目したい。

> impression ノ analysis.――sensation ニ帰ス（是ハ perception, conception. ニ対スル sensation ナラズ）undecomposable ナ phychological　phenomenon ヲ指ス Vision ニ就テ云ヘバ colour form, shading
>
> 「Monoconscious Theory」

ここで「impression」の特筆すべき性質とは、がそれ以上細分化されないものということである。続く一例に、

> ×Infinitely small particle ノ simultaneous impression ノ連続ハ decomposable[(6)] ナリ．Gray ノ impression ハ黒白ニ分ツ可ラズ．桃色ノ sensation ハ赤ト白ニ decompose ス可ラズ

とあるように、「impression」とは「Gray」や「桃色」が「白黒」や「赤ト白」に分解、いわば概念化されない感覚認識である。この認識は「infinite short time ニ於テ succeed スル impression」（無限に短い時間において継続する印象）という文脈からも、捉えがたい瞬間に成るものであるが、「focal idea ガ short time ニ於テ succeed スル」（焦点的観念が短時間に継続する）ことが、実際には起こりえない論理であると言われるように、現実的な焦点となるものとは「印象」であることが示唆される。「impression ノ vividness ハ其 impression ノ focus ヲ occupy スル time ニ proportional」（印象の鮮明さはその印象の焦点を占有する時間に比例する）のであり、焦点となるものはあくまでも分解不可能な「impression」なのである。言い換えれば、「情緒的要素（f）」が附着する際の「認識的要素（F）」とは、科学的知性たる観念認識ではなく、もうひとつの〈知〉としての「印象」という場であるということができる。

Ⅱ．情緒的要素（ｆ）の分類

現実世界の「直接経験」において認識の焦点となるのは「印象」であり、これに「情緒的要素（ｆ）」が生じることが明らかとなったが、読書を含む「間接経験」において、この関係性はどのような様相を呈するのであろうか。

「日常経験する印象および観念」に挙げられた三種のうち、「文学内容たり得べき」は「㈡Ｆに伴ふてｆを生ずる場合、例へば花、星等の観念に於けるが如きもの」であるが、「㈢ｆのみ存在して、それに相応すべきＦを認め得ざる場合、所謂 “fear of everything and fear of nothing” の如きもの」についても文学内容の形式として捉えようとしていることは注目に値する。シェリーの詩を例に挙げたその試みは以下の通りである。

“Out of the day and night
A joy has taken flight;
Fresh spring, and summer, and winter hoar,
Move my faint heart with grief, but with delight
No more—Oh, never more!” —Shelly, *A lament.*

此歌は悲しみの原因につき毫も云ふところなし、何故の悲しみか、そは審らかならず。たゞ哀れなりと歌ひしにて恋のためか、病のためか、吾人は知るに由なし。詩人はこれによりたゞ悲哀と云ふ情を伝ふるのみ。凡そ此種の詩を味ふには自然三種の方法あり。㈠読むもの先づＦを想像にて補充して（Ｆ＋ｆ）なる形式に改むるか、或は㈡悲哀なる観念を想起し其内容を十分に味はひ、しかして後、それに対し吾人の同情を傾くるか、或は㈢前途㈠㈡を結合せざるべからず。かくの如く㈠㈡は共に（Ｆ＋ｆ）の形式に帰着し得るものにして其差は㈠悲哀の原因＋悲感㈡悲哀の観念＋悲感なるに過ぎず。

この箇所に関して福井慎二[7]は、ｆについて「意識過程の観点から捉え直」せば「言葉として書き記されたｆすなわち喜怒哀楽を表す単語なども、インクのしみを活字と判別し意味を想起するといった知覚過程においては、意識の焦点に上る限り必ずＦとして捉えられるはず」であるとし、Ｆとｆの関係性の不明瞭さを指摘する。また、鈴木敦子[8]も「Ｆに附着するｆという人間（読者）心理の話をしているのか、記述（作品）中にｆのみが描かれているという話をしているのか」とｆの曖昧さに触れている。こうしたｆの不明瞭さから福井はｆを「『悲しい』などと直接明確に喜怒哀楽を表した単語、又は統語関係によってその情緒内容が、リアルに感じ取れなくても、たとえ観念的であっても理解される場合を指している」とする。つまり、ｆがＦでもありうるということへの指摘であり、それが「理論としての欠陥」とされる所以でもある。

しかし、少なくとも当時ひとつの理論として呈示された以上、この多様な解釈を孕む

記号にもある論理性を見出すことは可能ではないだろうか。これまで見てきた経験世界の意識という大前提は、その俯瞰的視座となるように思われる。では実際、文学内容の形式として相対的に妥当するｆとは何を指すのか。第二編第三章「ｆに伴ふ幻惑」でｆは次のように分類される。

第一に考ふべきは文学のｆと一概に云へばとて、⑴読者が著書に対して起すｆ、⑵作者が其材料に対して生ずるｆ、及び其材料をとり扱ふ際に生ずるｆ、又之を成就したる時生ずるｆ、⑶には作者の材料たるべき人間、禽鳥のｆ（無生物にはｆなきものと仮定して）、以上三種のｆを区別せざるべからず。

第二には人事界または天然界にありて直接経験をなす時のｆ、及び間接経験をなす時のｆ、即ち記憶想像のＦに伴ふて生ずるｆ、もしくは記述叙景の詩文に対して起こすｆとを区別せざるべからず。

上記の区分を念頭に、経験世界の意識という観点からｆを検証すると「作者の材料たるべき人間、禽鳥のｆ（無生物ｆなきものと仮定して）」とは、Ｆたるｆ、すなわち知覚の対象であるＦとしての、表記されたｆであると言うことができるだろう。したがって、文学内容が概念として記される場合のｆはＦとして考えねばならず、それに対して生じる現実的なｆこそ本質的なｆというべきである。このことから「作者が材料に対して生ずるｆ及び其材料をとり扱ふ際に生ずるｆ」とは作者が経験世界で捉えた対象とそれを概念化する過程に生じるｆであり、「これ成就したる時生ずるｆ」が文字として表記された概念に対するものである場合、「作者」は「読者」の位置に移行しているのであって、「読者が著書にたいして起すｆ」と同様のものといえよう。

以上のことをふまえ、ｆを整理すると、まず「間接経験がその強さにおいて直接経験に劣るの事実」と言われるように「直接経験」における「情緒的要素（ｆ）」こそ最も強度に作用する本質的ｆと位置づけることができる。次に「間接経験」一般に生じるｆ、そのうち読書経験におけるリアルな「読者のｆ」というものを挙げることができる。その他、文学内容として表記されたｆとは、知覚対象のＦとして、これらと区別しなければならない。

Ｆの内容としてｆが表れる場合に関して、ｆの性質の表出法は「間接」（客観）及び「直接」（主観）の二種があるとされる。（第一編第二章「文学的内容の基本成分」）「間接または客観的といふ意は情緒の状態を喚起するに先ち、其原因を記するか、或は其肉体的徴候を挙げて情緒其物の記載は之を省略して、ただ読者の想像に委ぬる」であり、「直接または主観的方法に至りては先づ何はともあれ情緒其物を述べ、而してそれに伴ふ結果現象は自ら伝播するに任ず」とする。ここで直接法、間接法として*「㈠Ｆ＋ｆとなつて現るゝ場合、㈡作者はｆを云ひ現はし、Ｆは読者により補足せらるゝ場合、㈢作者Ｆを担任し、ｆは読者に於いて引き受くる場合」*を挙げているが、既に引用した「原因につき毫も云ふところな」く、詩人によって「たゞ悲哀と云ふ情を伝」えるとい

うシェリーの「嘆き」は、人間の情緒が「間接的」に文学的内容として表されたものであるということがわかる。すなわち、*「㈡作者はｆを云ひ現はし、Ｆは読者により補足せらるゝ場合」*とは、第一編第一章「文学的内容の形式」にみた「㈠読むもの先づＦを想像にて補充して（Ｆ＋ｆ）なる形式に改むる」こと及び「㈡悲哀なる観念を想起」することに同じであるといえよう。というのも、「㈡悲哀なる観念を想起」することは、間接的に表れたｆとしてのＦを「読者」が「悲哀」という「観念」Ｆに改める、いわば㈡にいう「読者」による「補足」が行われているためである。

このように直接であれ間接であれ叙述されたｆは意識の観点から見れば、いずれもＦであるにもかかわらず、文字表記として表れるＦたるｆも（Ｆ＋ｆ）（本来、文学内容たるＦ＋読者のｆであるべき）の公式のｆと区別なく用いられている。しかし、今見てきたようにこれが文学内容の説明であることをふまえれば、同一のｆでないことは明らかであり、上述の㈠㈡㈢はＦを文学内容の種類によって分けたもの、いずれも「観念」としてのＦであるため、これに「読者のｆ」が附着してこそ文学的内容の形式（Ｆ＋ｆ）として「文学内容たり得」るのである。

ここまで、ｆがリアルな「直接経験」におけるｆ、「間接経験」一般におけるｆ、「間接経験」中、特に読書経験における「読者のｆ」、さらに表記された文字であるＦにおける材料としてのｆとして用いられていることが明らかとなった。先行研究にも指摘された通り、ｆの用法に関して説明不足の感はあるが、ｆがもとより誰かや何かの「情緒」として意味付けられているわけではなく、あくまで「要素」、いわばそのものを成り立たせる基本的内容や条件として用いられている以上、概念自体がある程度幅のあるものであることはやむを得ないというべきだろう。

Ⅲ．読者のｆ

「元の情緒」とされる経験世界のｆこそ、情緒の原型ではあるが、「文学」を定義づけるために考案された記号であることを鑑みれば、「読者のｆ」こそ「文学的内容の形式」に妥当するものであるといえよう。「読者のｆ」が読書という行為を媒介とした「間接経験」であることはいうまでもないが、それはいかなる性質のものであるのか。端的に言えば「吾人が文学に対する時」「文学の主要成分たる情緒」である「一種の感動」は「情緒の再発」によって生じるとし、Ribot の『情緒の心理』を引きつつ次のように説明される。

> ⑴情緒の記憶は大部分の人にありては虚無なり。⑵或人々は半ば知的、半ば情緒的記憶を有す。即ち其情緒的分子は知的状態の聯想力をかり、たゞその一部を想起し得るに止まる。⑶又、或極めて少数の人々は真正の完全なる情緒の記憶を有す。
> （第二編第三章「ｆに伴ふ幻惑」）

この分類に基づいて、読者のタイプを類別すると、⑴に当てはまる人が「文学など何処

に面白味ありやなど称して澄し居る俗輩」、「文学に縁のなき人々」である一方、(3)に該当する人は「感情の記憶実際元の儘にて復帰」すなわち「直接経験」における情緒と同様のものを再現することができるが、「折角の文学も却つて思ひ掛けざる怪我の本となること」があるため、読者には適さない。したがって(1)(3)は文学を享受するに不適であり、「真に文学を楽み得る資格を具ふるは(2)」ということになる。その資格とは「文学書を読み面白く感ずる主因」でもある「元の情緒が幾分か希薄になつて出現する」「間接経験」には違いないが、「直接経験」と適度に差異をもって情緒の引き起こされる場合、という条件にその特質はあるといってよい。同じ読書という行為を通しても、読者に情緒が引き起こされない、また逆に「直接経験」の情緒と同様の情緒を引き起こす場合は、「読者のｆ」にふさわしくないのである。

読書行為において、表記されたｆがＦである以上、先に述べた「㈠読むもの先づＦを想像にて補充して（Ｆ＋ｆ）なる形式に改むるか」のＦ、「㈡悲哀なる観念を想起し其内容を十分に味ひ、しかして後、それに対し吾人の同情を傾くる」（第一編第一章「文学的内容の形式」）の「観念」、および「*㈠Ｆ＋ｆとなつて現るゝ場合、㈡作者はｆを云ひ現はし、Ｆは読者により補足せらるゝ場合、㈢作者Ｆを担任し、ｆは読者に於いて引き受くる場合*」（第一編第二章「文学的内容の基本成分」）はいずれも「観念」Ｆとして回収されるのだが、「読者のｆ」が生じる以前に、読者にてＦの「想像」による「補充」、「観念」の「想起」、「補足」、「引き受」け（記されたｆはＦと捉える）、といった段階のあることに注目したい。必ずしも与えられたＦに直接ｆが単純に附着するわけではなく、以上のような手続を踏んで「読者のｆ」は引き起こされるのである。

表記された文字は「観念」Ｆとして知的に認識されるが、それだけでは「三角形の観念」や「幾何学の公理」「Newton の運動法則」のように「吾人の知力にのみ作用するものにしてその際毫も何らの情緒を喚起」しない。Ｆを理解するだけではｆは生じないのである。ただし、読書という「間接経験」において記された概念の理解が最低限必要であるともいわねばならない。

> Ｆなる者は全て具体的のものたることを忘るべからず。（中略）ｆを引き起しうる為には其Ｆが必ず具体的光景なるか、又は、これに改作し得るものならざるべからず。即ち月と云へば月の観念も元より必要なるべきも、先づ第一に欠くべからざるは月の光景なり、此画姿さへあらばｆを生ずること容易なり。但し抽象的観念だけにてはｆを生ずること頗る困難なるのみならず、時には全くｆを欠損すること屢々なりとす。（第一編第二章「文学的内容の基本成分」）

「ｆを引き起し得るため」のＦとは「観念」ではなく、「具体的光景」または「これに改作し得るもの」であることが要される。ここで、先に述べたＦにおける「観念」と「印象」の関係性を思い出したい。というのも、ここに言われることと同様、ｆを伴うＦとは焦点の「idea」である場合ではなく、「impression」であるべきである。読者に

理解された概念がｆを引き起こすためには「観念」から「印象」の段階に移行することが必要となるのであって、感覚的印象から帰納的に観念に至る科学的認識とは逆方向の認識のありようがここに浮かび上がる。

月を概念の理解に留まらず、「具体的な光景」として心象化、いわば「印象」化するとは、それを可能とする月の認知が前提となる。月は具体的な形をもつものであるが、「悲哀」といった「観念」の場合も同様に「情緒の記憶」として、悲感という感情の経験を持たなければ知的な理解に終始してしまう。「recognition」（認知）が「recognition（—memory—repetition ト思シ見ヨ）」（認知—記憶—再現）[(9)]と言われるように、二度以上の経験が観念を形成し、その認識から記憶が再生されることは疑い得ない。だが、観念に至る認識も「Data ヲ云ヘバ悉ク sense impression」[(10)]であるように、すべての認識は感覚的な印象に由来するのである。

では、経験世界とは逆方向の認識として「観念」が「印象」の段階まで移行するとはどのようなことであるのか。一言に「印象」といっても、「直接経験」におけるそれが外界からの「sense data」（感覚情報）に成るのに対し、「間接経験」である読書の概念から得た「観念」から見出された「印象」とは自己の経験を拠り所としているはずで、差異のあることは明らかである。「impression ノ analysis」にみたように、それ以上分解できないとされた「sensation」（感覚）と「perception, concept. ニ対スル sensation」（認知、概念に対する感覚）とは区別されている。このことは Morgan を参照した「Introspection ト experience トハ同時ニ出来ズ」（内省と経験とは同時にできない）（「Monoconscious Theory」）に象徴的に示されているといえよう。すなわち、前者は「experience」（経験）として一回性の「impression」（印象）であり、後者は「introspection」（内省）として再生されるそれである。「間接経験」に「印象」として認識されるときの「印象」とはまさに後者である。したがって、月の「観念」が具体的な「光景」「画姿」、つまり「印象」となる時とは、自己内部の経験を表象したものに他ならないのである。

実際の月と「観念」の月との間は言うまでもないが、「観念」の月と「改作」したものとの間にも差異はあり、「改作」された月が「改作」する主体個々に異なるものであることからも、「印象」は主観的認識の場であるということができる。「審美情緒」（第一編第三章「文学的内容の分類及びその価値的等級」）が「主観的感情」と言われる所以ともいえよう。反対に「観念」としての月は概念という形をもつがゆえ、他者との間に理解可能なものとして共有されるのである。

「情緒の再発」には想起される対象の認知が前提となるが、必ずしも自ら「直接経験」したもの、記憶をもつもののみにｆが生じるとは限らない。「情緒的分子は知的状態の聯想力をかり」て生じること、「凡そ文芸上の真を発揮する幾多の手段の大部分は一種の『観念の聯想』を利用したるもの」とあるように、理解の対象である「観念」が「聯

想」により形成されるため、「直接経験」からはみ出る内容からもｆが引き起こされることは可能となるのである。

さらに「詩人の技に伴うものにして内容その物に関すること多からざる」もの、「作家が文学的内容に対する態度」である「描き方」、つまり作家の表出方法に対してｆが引き起こされる場合が示される。（第二編第三章「ｆに伴ふ幻惑」）この方法に対して生じるｆとは、これまで見てきた意識の観点からどのように説明することができるのであろうか。このことは「㈠一刻の意識におけるＦ」に対する「㈡個人的一世の一時期におけるＦ」および「㈢社会進化の一時期におけるＦ」（第一編第一章「文学的内容の形式」）の関係性に重ねて考えることが可能である。㈠における焦点が一刻における認識であるのに対し、㈡㈢が「追想」によって始めて見出され、㈢に関しては事後的に「時代思潮（Zritgeist）」といわれたように、「表出法」や「描き方」という方法並びにそれに附着するｆは事後的に見出されたものなのである。「Introspection ト experience トハ同時ニ出来」ないことはここでも明らかである。

読者によって行われる「想像」による「補充」、「観念」の「想起」、「補足」、「引き受」け、「観念の聯想」はｆを引き起こすにたるＦを形成する過程であり、Ｆが理解に終わらず、ｆを引き起こすため、認識は観念認識より印象認識に移行する必要があった。「文学内容の形式」に妥当する「読者のｆ」が生じる過程にはこうした一連のＦの営為、いわゆる〈知〉の働きが必要不可欠なのである。「Emotional state itself ハ marginal background of consciousness」（感情の状態そのものは意識の周辺的な背景）（「文芸ノ Psychology」）とは、情緒的要素はそれ自体焦点的なものにはなりえず、焦点となるのはあくまでＦであることを意味するものである。このことから「情緒の復帰なき人は文学にも縁のなき人々」というのは、必ずしも感情の記憶をもたないのではなく、情緒の喚起される段階の「印象」に認識を移行することができない人を指すといえるかもしれない。

読書を通じて、そこに記される一語一句に必ずしも情緒が喚起されるわけでない。理解のみによって読み進められている時は「観念」認識の状態であり、ある観念から情緒の喚起される場合にこそ「観念」から「印象」へ認識が移行しているといえる。だが、こうしたことは理論の上であって、「如此手続は吾人日常詩文賞玩の際殆ど無意識に履行するところもの」（第一編第一章「文学的内容の形式」）と言われたように、実際、自覚的になされることはほとんどないことも事実である。

Ⅳ．宗教感情

ここまで記号としての情緒の解釈を中心としてきたが、その具体的な側面に触れてみたい。Ribot を参考に情緒は「恐怖、怒、同情、自己観念、男女的本能等」の単純情緒と「善悪、宗教感情」の複雑情緒に分類される。（第一編第二章「文学的内容の基本成

分」）このことは認識に付着する要素である情緒が、認識対象の発展に伴い、そのありようを変化させる論理の反映としての多様性であるといえる。「単純情緒」のうち「同情」「両性本能（恋）」が「本能」といわれるように、「情緒」は生理的、身体的な側面をも含む、極めて根源的な要素としても捉えられている。他方「複雑情緒」は「無数なるを以て一々これらに伴ふ感情の成分を解剖し、その発展の跡を究むるは到底不可能のこと」とされながらも、宗教感情、道徳感情と称されるものは「ノート」での言及を含め、特に強い関心が窺える。

「所謂神と称するもの」「無限」「絶対」という「Ｆに伴ふｆは決して強大なるべき理なきにもかゝはらず、宗教的ｆは最も強大を極むるものの一」と自ら言及するように、宗教感情なるものが「ｆはＦの具体の度に正比例」するという原則に背くものであることは言うまでもない。また、先に検証したところの認識と情緒の関係性、すなわち「focus」（焦点）を「occupy」（占有）するのは「impression ノ vividness」（印象の鮮明さ）であり、ｆがＦに附着する際のＦとは、「idea」ではなく「impression」であるということを鑑みても、「神」という「観念」であるＦにｆの附着することは特殊な場合であると言わねばならない。

「観念」は経験的に感覚を通じた情報から形成されるものであり、情緒が引き起こされるには認識する対象が「印象」であるか、または「観念」である場合には「印象」へ移行している必要がある。では、「神」という「観念」はいかにして絶対性、無限性を持ち、最上ともいえる情緒を引き起こし得るのであろうか。

> 神と称するところのものは一面に於いて知的渇望より出立して凡百の現象の原因をここに集合せしめたるものの如し。（吾人は知識的に其合理なるや、否やを問ふものにあらず。）されど更に他の一面に於いて神は人間に固有なる情緒のうちより湧き出でしものなることも亦疑の余地なきに似たり。（第一編第三章「文学的内容の分類及びその価値的等級」）

「神」が創造される理由に「知的渇望」及び「人間に固有なる情緒」の二つが挙げられる。まず、「神」が「知的渇望より出立」するいうことは、抽象としての「観念」が〈知〉の働きにより生成されるという論理と合致するが、これは経験的に獲得するものではなく、「吾人がなさんと欲して、なす能はざる理想の集合体たるに過ぎ」ず、「吾人の性質」の「投出」によるものであるとする。このことは「ノート」に次のように示される。

> Hypothesis ニ神ヲ欲シ absolute ヲ欲スルガ如キハ(1)経験サレベキ性質ナキ者ヲ assume スルナリ(2) assume スルモ生存上何等ノ功徳モナキナリ．吾人ハ抽象ニ慣レタルノ結果抽象シ難キ者迄ヲモ抽象セントス而モ此抽象ノ結果ハ intellectual curiosity ヲ満足スルノ外何等ノ功徳モナキコトヲ覚ラザルナリ
>
> 「超脱生死，Religion & State，Religion ノ起源，Unknowable，Religion」

「生存上何等ノ功徳」がないにもかかわらず、人が「神」「絶対」を欲するのは、「intellectual curiosity」（知的好奇心）を満たすために行われる「抽象」であり、これが「慣レ」によるということからも、それらは自覚的、意図的に創出されるものではない。「intellectual curiosity」を満たすための「抽象」は、ほどんど〈知〉の「器械的性質」の結果なのである。だが、人間が「絶対」「無限」でない以上、「投出」する人間の内容とは、そのうちにある「不可能」性ではなく「可能」性として「改めた」ものとしての「理想」でなければならない。「Idea ハ経験ノ limit」（理想は経験の限界）と言われることからも、経験を材料に〈知〉は「理想」である「limit」（限界）を創出するのである。

science ハ理想ヲ許ス．Geometrical straight line, circle ノ如キ是ナリコハ実際目撃シ難キ者ナリ．（中略）経験シ得ル幻象ヲ generalise シテ経験シ得ザル limit 迄 stretch セル者ナリ然シ経験シ得ル possibility アル者ナリ．

「超脱生死，Religion & State，Religion ノ起源，Unknowable，Religion」

「科学」としての〈知〉は対象を「理想」として「経験シ得ザル limit 迄 stretch」すること（経験し得ない限界まで引き伸ばすこと）、非経験的事物を創造することが可能である。とはいえ「certainty ノ唯一ノ土台トナルベキ experience」（確かさの唯一の土台となるべき経験）とも言われるように、経験の確かさを証明するものは経験外になく、「観念」としての「絶対」は「無意味ノ言トシテ字典中ニ存在セシムル」こと、「議論ノ為ニ assume ス」ること、あるいは「感ズル」ことはできても、「絶対ノ証明」をしたことにはならないとしている。普通、「観念」が経験を通じて生成されるのに対し、経験上得るものではない「絶対」は、内容の伴わない「観念」いわゆる「imaginary」（空想）に過ぎないのである。

「神」「絶対」「無限」といった超越的「観念」が「慣レ」としての「intellectual curiosity」によって得られながら、その実質性は退けられたといえる。とすれば、それらは知的Ｆと同様の抽象観念であり、原則通り最大のｆが引き起こされることにはならないはずである。しかし、ここで注目すべきは「神」なるものが第二の側面としての「人間に固有なる情緒のうちより湧き出で」たものであるということである。このことは「神」をはじめとする絶対的対象が情緒に要請されていることを意味するといえよう。

情緒が生じる際、認識する対象は「観念」ではなく「印象」であり、その「印象」とは「undecomposable」（分解不可能）であることをそのものの必要条件としていた。つまり、「印象」がそれ以上分解できないため、そこに至って〈知〉は思考停止せざるを得ないのである。そうした分解不可能な窮極地点とは、まさに「絶対」「無限」というべき境地であり、宗教情緒は「神」をはじめとする「undecomposable」であるものに附着するゆえに、「強烈」となると考えられるだろう。経験的に獲得した「観念」でないだけに、具体的な「印象」に還元することは困難であるが、焦点となる対象の「un-

decomposable」という性質こそ情緒を喚起する条件であるといえる。

「吾人の冷静なる批判を以てすればその何の意たるやを知るに苦しむ」ものであるにもかかわらず、絶対的な領域が「神」という「観念」として他者と共有されるのは、ひとたび「観念」に附着すると、因襲的に継続するものであるということがその原因として挙げられるだろう。情緒の固執的性質は第二編第二章「ｆの変化」[11]に端的に示されてもいる。「吾人が為さんと欲して為す能はざる力を自然界に見出せば吾人はこの力を賞するがために自然界を神なりと讃美す」、「神とは英雄を無限に廓大して、英雄は神の縮図に過ぎず」とあるように、「神」の「観念」の内実は必ずしも一様ではなく、それらのもつ絶対性に「神」の名が用いられているのであり、それに附着する〈情〉は変わらないのである。

人間の知的営為によってのみ創造されているかのごとき「神」「絶対」「無限」には、判断停止の場として、分解不可能なる認識に強烈に作用する〈情〉の論理が映し出されている。宗教的Ｆとは、情緒のもつ固執性ゆえに成り、それに伴う情緒が宗教感情として位置づけられるものである。

Ⅴ．道徳感情

「道徳は一種の感情」であり、「善悪観念の抽出」という言葉をもって論じられる。「本能」に象徴されるように「単純情緒」が身体に近接した原始的要素であったのに対し、この情緒は「善悪」という価値と結びついた情緒である。

「道徳派対芸術派」とあるように、道徳は芸術と相対するものとして位置づけられている。「審美情緒」というべき「芸術」への情緒は、「美に対する一種の「主観的感情」であり、「常に快感」であり、それが「道徳感情」に優る場合は、読書に関して言えば「作家の表出方に眩惑せられて善悪の基準を顚倒」することにある。また「惨劇」なる「破壊的勢力」、「落語」を代表する「道化趣味」、「裸婦画」に象徴される「美術」が「不道徳分子」であるにもかかわらず、「崇高」「滑稽美感」「純美感」としての情緒を引き起こす、いわば「道徳ｆの当然占むべき位置を審美的ｆが横領」することは「審美的ｆ」の強力さを物語っている。これら美に対する快感は「不道徳を犯す」要因となるため、道徳と対立せざるを得ないのである。「ノート」にその詳細は次のように記される。

> 生ハ目的ナリ而シテ生ノ quality ハ pleasure ナラザル可ラズ是根元的ナリ只此 pleasure ハ永キ間ニ第二期第三期ノ如ク諸々方々に蔓延シ来ルガ故ニ互ニ衝突矛盾ヲ免レザルノミ．道徳ハ社会ヲ構成シタル後始メテ已ヲ得ズ之ヲ作リタル者ナリ．束縛スル為ニ作リ無限ノ pleasure ヲ一人ニ与ヘザラン為ニ作リ〔シ〕者ナリ．社会ハ固ヨリ人生ノ第一義ナル生命ニ必要ナリ之ヲ廃スル能ハズ之ヲ維持センニハ道徳ナカル可ラズ茲ニ於テ各人各個ニ生ノ quality ナル pleasure ノ一部分ヲサキ

テ他ノ大ナル pleasure ヲ存スルコトニ決セリ故ニ道徳ハ仕方ナク出来上リタル者ナリ．人ハ固ヨリ不道徳ナル物ニ於テ pleasure ヲ有スルナリ而シテ此 pleasure ハ aesthetic ナリ是 aesthetic pleasure ヲ不道徳ノ side ニ見出ス所以ナリ．

「文芸ノ Psychology」

生は「pleasure」（快）に向って存在するも、社会の必要性と同時に道徳もまた欠くことのできないものとして生み出されるものであり、社会が他者との共存の場であることが道徳を成り立たせている。社会との交わりによって「第二期第三期」と漸次抽象化した結果として道徳が生まれるとき、「衝突」する「aesthetic pleasure」（美的快）とは、原初的なものであるといえるが、高次の情緒を差し置いて生ずるそれとは、どのような論理をもつのだろうか。

Art ハ（F＋f）アルニ因ツテ始メテ成立シ得ルナリ f アツテ F ナキトキハ art トナリ能ハズ F アツテ f ナキトキモ art ヲ生ズル能ハズ道徳ハ（F＋f）ナリ故ニ art トナルヲ得不道徳モ（F＋f）ナリ故ニ art トナルヲ得然レドモ不道徳ナル（F＋f）ハ不道徳ナルガ為ニ art トナルヲ得ルニアラズシテ aesthetic ナル為ナリ換言スレバ此時ノ F ハ immoral idea ニアラズシテ F 即チ beautiful idea ナリ而シテ此 F ハ同時ニ immoral ニシテ beautiful ナリ．但シ美術的ニ之ヲ見ルトキハ少ナクトモ其 beautiful ナルヲ感ゼンニハ(1) beautiful side ヲ見出ス力ナカル可ラズ(2) immoral side ヲ忘レザル可ラズ(3) immoral side ヲ忘レンニハ beautiful side ガ顕著ナルカ又ハ顕著ニ之ヲ表彰シ得ザル可ラズ．今一物アリ（F＋f）トス此（F＋f）ハ decomposable into（F'＋f'）＝immoral idea＋不快感（F''＋f''）＝beautiful idea＋快感．

「文芸ノ Psychology」

美術を鑑賞する際、「immoral side ヲ忘レ」（不道徳的側面を忘れ）て「beautiful side」（美的側面）が見出されているように、「（F'＋f'）＝immoral idea＋不快感」「（F''＋f''）＝ beautiful idea＋快感」に分解された F のうち、ある焦点が「美」であると感じる時には、前者を忘れ、後者が優勢とならざるを得ない。これは意識中でいえば、「beautiful side」（美的側面）が焦点となり、「immoral side」（不道徳的側面）は識末に存在することとなる。このことは焦点の単一性がうたわれた「Monoconscious Theory」と重なりつつ、一刻における「印象」としての焦点が「美」という価値で捉えられることを物語るものである。いわば「美」とは分解不可能にして最も根源的な〈情〉であると言うことができよう。

「文学」にせよ「落語」や「美術」にせよ、芸術における「美」に引き起こされる情緒が、いずれも感覚にうったえるものであるのに対し、「道徳情緒」は善悪という観念に附着するものであるため、生じ難さが生じざるを得ない。しかし、「道徳感情」の生じ難さは、それが知的 F と同様、「観念」であることのみにあるのではない。この情緒

が「複雑情緒」として「普遍的判断」の領域に位置づけられるように、そこには「時代の最高判断に基けるもの」である「判断力」を要するのである。

〇余思フニ道徳ノ根本的要素ハ judgment ニ帰ス Hypothetical ニセヨ，categorical ニセヨ moral judgment ハ end ノ idea ナケレバ起ラズ．遂ニ intellect ニ帰着ス

余等ノ行為ヲ支配スルハ単ニ sentiment ノミナリト思フハ違ヘリ

平生ハ sentiment ニテ行為スルハ事実ナルベシ然レドモ吾人ハ reflect スルナリ矛盾ヲ忌ムナリ吾人ノ行為ノ end ヲ考ヘルナリ従ツテ此 end ガ変化スルナリ．Reflection ノ結果余ハ新シキ moral conviction ヲ得タリトス．然ルトキ余ハ如何ニ行フベキカ此 new conviction ニ従ハンカ．Old sentiment ハ之ヲ阻ムベシ．Old sentiment ニ従ハンカ New conviction ハ之ヲ阻ムベシ．此 struggle ノイヅレガ勝ヲ制スルカハ時ニヨリ人ニヨリテ相違センモ少ナクトモ new conviction ガ “idea force” トナツテ action ニ influence ヲ与フルハ明白ナラズヤ否 old sentiment ヲ棄テゝ conviction ニ従フ方却ツテ吾人心裏ノ満足ヲ得ルナラン．Old sentiment ニ従ツテ事ヲナシタルトキハ自ラ顧ミテ甚ダ忸怩タルコトアルヲ見ン然ラバ吾人ノ行為ヲ影響（原）スルコトノ深キハ sentiment ニアラズシテ却ツテ conviction ニアルヲ認メン去レドモコハ理窟ノミニアラズ吾人ハ true moral judgment ニ従ハザルベカラズトノ観念ニ随伴スル sentiment ガ old sentiment ニ勝ツニ過ギズ（中略）此 sentiment ナキ場合ニハ吾道徳ヲ実行セザルノミカ実行セズシテ平気ナリ．

「Ethics」

道徳が「judgment ニ帰ス」（判断力に帰す）と言われるように、「判断力」こそ道徳の主要素である。とはいえ、「end ノ idea ナケレバ起ラズ」（目的の観念なければ起らない）とあるように、「観念」としての〈知〉が「判断力」の作用する場に必要とされることも確かである。「New conviction」（新たな信念）と「Old sentiment」（古い感情）との間に見られるように、感情の固執はここでも明らかであって、道徳感情に心理的葛藤が窺えることも看過できまい。

「吾人は実際において道徳的なれども文学上または文学を味ふ時のみ不道徳なることあり」というのは「人ハ固ヨリ不道徳ナル物」と一見矛盾するようであるが、「実際において」とあるように、必ずしも実践的に善をなしうるという意味ではなく、善悪を判断するだけの可能性を胚胎していることをいうものであろう。というのも、「所謂学者と称するものの倫理説の如きその時代の最高判断に基づけるもの」も「到底これを実践履行するの不可能なるは事実の証明する所なり」としているためである。

「情緒的要素」は認識のありように従いその様相を変化させる。「識別力の発達」「識別すべき事物の増加」に伴い「時と共に増加する」「認識的要素」の流動的性質に対して、情緒は固執的性質をもつ。宗教感情において「情緒的要素」自体が変化せずとも

「認識的要素」が「自然界物体」「英雄」「偶像教の神」「耶蘇教の神」と可変的であったことは顕著な例である。また、複雑情緒は「知力」と結びついた情緒であり、「道徳感情」に関して言えば善悪観念における情緒であるため、「知力」のみならず「判断力」の作用なくしては得られないものであった。このことは〈意志〉との関係性も含めて改めて考えねばならない。

*

『文学論』・「ノート」を対象に〈情〉の構造的理解を試みてきたが、それは常に〈知〉との関係性の中で立ち現れるものであった。〈情〉が喚起される条件とは、その対象が必ずしも経験的なものではなくとも、判断停止の場としての「印象」認識に他ならないが、本質的には一刻という捉えがたい時間に生じるものである。越智治雄は初期作品群に「ある瞬間に人生を凝縮しようとする志向」[(12)]を見出し、認識の問題として後年にも引き継がれていくことを指摘しているが、そこに必ずしも憧憬なるものを見出さずとも、経験世界の順行する時間と別次元の凝縮された瞬間という二つの時間認識があることは明らかであって、それはまさに「観念」と「印象」という認識と情緒との関係性であったともいえる。本稿で個々の作品に論及する余裕はないが、強烈な〈情〉を引き起こしうる「印象」認識という場は、初期作品の美的世界に象徴的である。

他方、〈知〉の器械的発展に伴って情緒は多様化するが、その固執的な性質ゆえ、既に形骸化した概念に対しても依然として残り続けることも否めない。〈知〉は〈情〉を可視化することは可能であっても、それ自体を制御することはできないのである。人間の心理をも含む不可知なるものへ、その本性を超えて向かうことから生じる近代知識人の苦悩は後年しばしば描かれることになるが、ここまでの一連の論理にはその萌芽ともいうべき漱石の意識を見てとれる。

〈情〉という要素は「文学」への問いから『文学論』を中心に理論として説かれた一方、その喚起こそ「文学」の目的とされたことを鑑みれば、初期作品に顕著に見られる過去や夢、怪異といった経験的知性では、はかりがたい世界のモチーフ化は、「文学」なるものを掴まんとする試みの一端であったともいえるだろう。

（1） 近代的知性としての「科学」と「文学」との関係性については拙論「初期漱石における『科学』の様相――『文学論ノート』をめぐって――」『三田國文』（平成25・6）を参照されたい。

（2） 村岡勇編『漱石資料――文学論ノート』（昭51・5）

（3） ここで「日常経験」は「認識的要素（F）」である「印象及び観念」にかかるものであるが、「情緒的要素（f）」が「認識的要素（F）」に附着するものであることは、両者が「日常経験」におけるものであることを意味すると考えられる。

（4） 人間の凡テノ智識ハ sensation, experience ニ始マツテ intelligence（association ニテ action ヲ control ス）ヨリ perception ニ移リ conception ニ至ル Data ヲ云ヘバ悉ク sense impression

ナリ observation 又ハ experiment ニテ得タル　impression ヲ analyse シ abstract シ又 synthesis シ generalize シ classify シテ law トナス是 science ナリ（「超脱生死，Religion & State, Religion ノ起源，Unknowable, Religion」）

（５）　岡三郎「夏目漱石の ‘monoconscious theory’（純一意識）の比較思想的解明」（『比較思想研究』昭55・12）

（６）　文脈上、「undecomposable」の誤記であると考えられる。

（７）　福井慎二「（Ｆ＋ｆ）の科学の前提――漱石『文学論』への私註――」『国文学研究ノート』（平８・11）

（８）　鈴木敦子「ｆ〈情緒〉をＦ〈認識〉する漱石」『比較文学研究』（平12・８）

（９）「ノート」（「Enjoyment ヲ受ケル理由 Various Imterpretations」）

(10)「ノート」（「超脱生死，Religion & State, Religion ノ起源，Unknowable, Religion」）

(11)「ＡなるＦにつきてあるｆを起す時、ある原因よりこのｆは他物ＢなるＦにも附着し来る現象」である「感情転置法」や「(a)Ｆそのものが消滅するか、或は(b)Ｆそのものにｆを附着する必要なきにもかかはらず因襲の結果習慣上より従来のｆを附着せしむる」「感情の固執」にその性質は明らかである。これは固定観念を形成する性質であるともいえよう。

(12)　越智治雄「漱石の初期短編――『漾虚集』一面――」『国文学』（昭45・４）